

報告タイトル

中国、韓国へ移動した日本人技術者の国際労働移動に関する考察

A study of international labor mobility of Japanese Engineers who moved to Korea and China

氏名(所属)

松下 奈美子(名古屋産業大学)

MATSUSHITA Namiko (Nagoya Snagyo University)

要旨(800字程度)

本論文では、東アジアにおける高度人材の国際移動というテーマを発展させ、日本から“離れる”高度人材の潮流に着目する。従来の日本の高度人材研究は、いかに高度人材を獲得するかという受け入れに焦点を当てたものが中心である。しかし、2000年代初期と現在では東アジアのバランスオブパワーも大きく変化した。本研究では、日本をめぐる東アジアのヒトの移動に関して、この30年間にパラダイムシフトが起きたと考え、日本は高度人材が離れていく段階に入ったという仮説を立て、離日高度人材に着目し、その移動を検証する。離日高度人材を大別すると、第一に研究者や技術者など日本以外の国で職を求め移動する人材、第二に、帰国を前提とせず日本以外の大学、大学院に進学する若年人材である。研究者や技術者の移動に関しては、頭脳流出やアントロプレナーシップなどのテーマで研究が行われてきた。特に、藤原(2016)の『技術流出の構図』では、特許データの国際移転の登録事実から、日本の技術流出が詳細に明らかにされている。近年こうした研究が蓄積されてきたが、日本を出る研究者や技術者の「ヒト」の移動よりは「技術」や「特許」の移転、流出に主な焦点が当てられてきた。

本論文では、藤原(2016)の研究を援用しながら、1990年代から2000年代初頭に日本から中国、韓国に移動した技術者を研究対象とし、国内の労働研究と国際労働移動研究を繋げ、日本人技術者の移動を説明する。具体的には、1990年代後半以降、日本の大手電機、半導体メーカーによる中高年技術者のリストラや配置転換に伴う退職が、技術者の東アジアへの移動の要因になったと言われていること、また技術や特許の国際移動が2000年代以降の韓国、中国の半導体、電機産業の発展に一定の寄与を果たしたとされる言説を国際労働移動の視点から考察する。